

旭川文学資料友の会

## 友の会通信 第30号

発行・NPO法人 旭川文学資料友の会  
〒070-0044  
旭川市常磐公園 旭川市常磐館内  
電話 0166-22-3334  
印刷・株式会社あいわブリント

## 「周年」の文学者たち

旭川文学資料館館長

## 三原 一仁

今年二〇二三年は、大正十二年から百年、つまり関東大震災から百年の年です。

文学的には、安部公房の没後三十年、宮沢賢治の没後九十年、有島武郎の没後百年にあたります。安部公房は、来年一月が生誕百年にもあたり、今年と来年は読者諸氏には気忙しい年となりそうですね。

有島武郎と安部公房については、文学以外のことなのですが、ちよつと気になることがあります。

二人はともに東京生まれです。有島武郎が死んだ大正十二年九月には関東大震災が起りましたが、彼は六月に没しているのもこの一大事を知らないままでした。

安部公房は、翌大正十三年三月に東京滝野川で生まれていますから、この震災の折には母親のお腹の中にいたはずですね。滝野川

は、芥川龍之介や室生犀星あるいは野上弥生子らがその被災状況を記している文士村とよばれた田端からはほどないところです。

安部公房は一九九三年一月に没しましたが、その二年後に阪神淡路の震災が起り、オウム真理教の事件が起きたわけです。

果たして、この二人の時代は違いますが、それぞれにこれらの大震災やらなにやらに遭遇していたら、その後どのような作品を残したことでしょうか。あの時期には、とりわけ安部公房のことが気になってしかたありませんでした。

安部公房といえば奇妙な作品とみられ、難解と突き放されることが通例といっても過言ではありません。ノーベル文学賞は存命なら安部公房が受賞するはずのものだったと、大江健三郎も言っていた二十世紀後半の日本を代表する世界的な作家であることはいうまでもありません。

彼は、新しい技術にいつも強い関心を持っていて、文学のみならず写真や音楽にも造詣が深く、とくにシンセサイザーは、あの富田勲と競うように手がけたという話をどこかで

読んだ覚えがあります。執筆も早くからワープロを使い、その性能の向上に、使い手の作家として大いに貢献したのは知られた話です。

実はなにを隠そう、安部公房の読者がここにもいます。

高校生になったころ、本屋の文庫の棚を見ていると、他校かもしれないのですが上級生とおぼしき二人の会話が耳に刺さってきました。「おい、安部公房って知ってるか?」「ああ、でも難しいんだよな、そんな一言二言だったと思います。名前は知っていましたが、とりたてて関心があったわけではありませんが。しかし、難しいという言葉に高校生はすぐさま反応します、では読んでみようということになるのです。

新潮文庫「壁くSカルマ氏の犯罪」これが安部公房との出会いでした。以来、翌年から刊行された「安部公房全作品」(新潮社全十五巻)になけなしの小遣いをはたき、その後没するまでのほとんどの作品を買い求めることとなつてしまつたのです。

一九九三年一月、雪の降りやんだばかりに入った店で、チーズがいっぱい載ったピザに燗酒を合わせたところで、テレビのニュースが安部公房の死を伝えはじめました。あつけにとられたという以外に表現のしようがありませんでした。

## 第二十五回文学資料展

# 「二十世紀文学 旭川の文学者たち 一」 を終えて

沓澤 章 俊

今回の文学資料展を実施するにあたり、大きな期待と少しのためらいを感じました。

というのも、常設展示室で以前から小コーナーを設けて現在活躍中の文学者を紹介していましたが、企画展示室で実施するとすると、取り上げる文学者の人選、人数、資料配分、著作権等を再確認しなければなりません。

素案をもとに館内で何度か話し合い、仕事を進めていくなかで、いろいろな不安が沸き上がり、準備不足の自分にまたもや呆れてしまいました。しかし、各文学者の皆様から快いご協力をいただき、資料のご寄贈、ご貸与を賜り、展示部会の方々の心強い助けもあつて、会場の飾り付け作業も比較的楽な気持ちで終えることができました。

加えて、旭川市文化振興課様並びに旭川市中央図書館様の協力を得て、会期中にダイジエスタ出張展示も実施することができました。

さらに、今年二月四日、五日に実施された令和四年度旭川生涯学習フェア「まなびピアあさひかわ」にもパネル展示で参加しました。

今後も、文学はもとより、絵画、写真、漫画等で表現活動をしている旭川の方々を紹介していきたいと思っています。



ダイジエスタ出張展示  
メガセントラリアル旭川店 1階  
2022年9月1日～30日



第25回旭川文学資料展会場  
旭川文学資料館 企画展示室  
2022年7月6日～10月22日



まなびピアあさひかわ  
旭川市神楽公民館 2階  
2023年2月4日、5日



ダイジエスタ出張展示  
旭川市役所総合庁舎 1階情報コーナー  
2022年9月1日～30日

開催したミニ展示 観覧者 感想ノートから

### 「旭川ゆかりの漫画家 山村輝夫展」

二〇二三年四月十二日〜六月三十日



旭川に来て、初めて山村輝夫さんの作品にお会いしたのは絵本でした。旭川の方とは思ってもよらず、あたたかな色彩とことばにあっていました。今も。

初めて山村さんを知りましたが、とっても絵がステキでカラフルでひきつけられました。「山っ子の村」ほしい！現在、購入することができるとかなあ？

昔の風景、いつまでも受け継いでいってほしいと願います。 2022・5・15

やっと来れました！ 全てが素晴らしいです。絵もさることながら、文章がとて面白いなあ。

月刊ダン、これはコレクションしたくなるような美しさ。んー、「北海道カララ」って

呼んでいたのですねーこの色彩ー！  
ほんとーに、広めたい。すごい人。

ギリギリ、まにあいました!!

子どもが小さい時、「キリちゃん」を、図書館で何回も借りてました。親としてはもう少し、絵本的な本を…”と思っていました。読んでみると絵と内容といい、すごく感動がいっぱいでした!!

子どもたちに「キリちゃん」を写メして送ると、息子、一番に「なつかしい!!」と来ました：「仕事なのに(笑)」

この本にはいろいろな思いが詰まっています!!  
ありがとうございます!!

附属中学同期を代表して輝に会いに来ました。 R4・5・20

山村さん、改めて読ませて頂きました。素晴らしいです。 R4・6・1

新聞で知りました。なつかしいのもっと多く方に見て欲しいですね。 5・20

同じ武蔵野美術(ムサビ)で同年代!うれしく、なつかしく見せていただきました。 R4・5・25

ひさしぶりに「キリちゃん」読みました。とてもよかったです。心にひびきます。

子どもが大好きだった絵本です。ありがとうございます。 2022・6・4

### 「旭川の芥川龍之介展」

二〇二三年十一月一日〜

二〇二三年三月三十一日



神奈川の高校で国語科の教員二年目の者です。旅行が好きで今回旭川を訪れました。

中略〜芥川が旭川を訪れていたこと初めて知りました。ミニ展示良かったです。勉強になりました。もっとゆっくりじっくり見てまわりたいのですが、あまり時間がなく、今度は午前中のうちにお邪魔しようと思えました。そのくらい見きれないほど展示がありました!

スタッフの方が「認知度が低くて困っています」とおっしゃっていたのが残念だなと思う資料館でした。

もっと色々な人に知ってもらいたいなと思ったので、冬休み明けの授業で生徒に思い出す話でこの資料館のことや学んだことを伝えようと思います。ありがとうございます。

2023・1

展示部会より

## 東京都内の文学館を巡って

黒田 忠

昨年十月下旬に三泊四日で、東京の文学館等を巡る機会がありましたので、その時のことについてお話ししたいと思います。最初に訪れたのは「新宿区立漱石山房記念館」です。

記念館のオープンは、夏目漱石（一八六七（慶応三）年～一九一六（大正五）年・四九歳没）の生誕一五〇年に当たる二〇一七（平成二九）年九月二四日です。記念館が建つ場所は、夏目漱石が暮らし数々の名作を世に送り出した「漱石山房」の建物があった場所で、記念館の内部は、書斎、客間、ベランダ式回廊などが再現されています。夏目漱石の私邸「漱石山房」に多くの文学者・門下生が集い、木曜日の午後が集まったことから「木曜会」と呼ばれていました。東大生の芥川龍之介が先輩の岡田耕三の紹介により友人の久米正雄と漱石山房を訪れ、夏目漱石と出会ったのは一九一五（大正四）年十一月一八日のことです。この出会いが無かったら芥川龍之介の文壇デビューはなかったかもしれませぬ。館内には、図書の閲覧ができるブックカフェ、企画展図録などが購入できるミュージアムショップがあります。館内は明るく、展示ケース

なども統一され、洗練された見やすい展示となっていました。



新宿区立漱石山房記念館

漱石山房の建物は戦火で焼失しており、記念館の建設には困難が伴ったと思われませんが、文豪の偉業を顕彰する為に立ち上がった人々の熱意が感じられる

記念館でした。次に訪れたのは「放浪記」浮雲などの小説家林芙美子（一九〇三（明治三六）年～一九五一（昭和二六）年・四七歳没）の「新宿区立 林芙美子記念館」です。

記念館の開館は、平成四年三月二二日です。一九四一（昭和一六）年から一九五一（昭和二六）年に生涯を閉じるまで住んでいた家が生活の様子もそのままに記念館として残されています。住み手の暮らしと安らぎを第一に考え建てられた数寄屋造りの民家風の建物で、豊かな生活を送る工夫にあふれている建物です。庭には孟宗竹が植えられ、寒椿や栴檀など林芙美子が愛した樹々が植えられています。門から玄関に上がる敷石には白石が敷かれていたり、記者たちが詰めた客間が用意されていたりと林芙美子のセンスや当時の流行作家の暮らしぶりを偲ぶことが出来る記念館でした。展示室は夫緑敏のアトリエだった

場所ということでした。室内の公開は年に数回行われるということですが、庭をめぐって垣間見ることが出来ました。今にも「いらつしゃい」と住人に声を掛けられそうな静かで落ち着いた雰囲気を感じることが出来る空間です。

次に訪ねたのは、「文京区立森鷗外記念館」です。明治の文豪森鷗外（一八六二（文久二）年～一九二二（大正十一）年・六十歳没）の生誕一五〇年に当たる二〇一二（平成二四）年十一月に新築開館しています。文京区千駄木は森鷗外がその半生を過ごした土地で、記念館は鷗外の旧宅「観潮桜」の跡地に建てられています。建物は地下一階が展示室一・二で一階が受付、ミュージアムショップ・カフェ



文京区立森鷗外記念館

エで二階は図書室、講堂となっています。図書室では鷗外の著作や研究資料を閲覧できます。展示ケースなどは統一され、洗練された展示でした。

最後は「田端文士村記念館」で芥川龍之介をはじめとする田端ゆかりの文士・芸術家の功績を通じて「田端文士芸術村」という歴史を後世に継承していくことを目的に一九九三（平成五）年十一月に開館しました。明治期

に上野に東京美術学校(現・東京藝術大学)が開校されると次第に若い芸術家たちが暮らすようになり明治三六年に板谷波山(陶芸家)が田端に窯を築き、大正三年には芥川龍之介、大正五年には室生犀星が暮らしました。田端に関連する芸術家、文士は七十名以上になります。開館から三十年余りになるので雰囲気は少し旭川文学資料館に似ている感じがしました。今回以上四館を巡りましたが、その他、美術館、博物館などもめぐり公共交通機関を利用しての移動で時間と体力を消耗しましたが、他の文学館を巡ってみて旭川文学資料館の優れている点もたくさん見つけることが出来ました。それは次の点です。

- 展示スペースが広い(展示の点数が多い)
- 展示ケースが統一されていない(丸井さんの宝飾ケースやキー屋さんのショーケース等市民の方の善意の寄贈のお蔭・市民の協力で成立している)
- おもてなしの心がある(生花を飾っていたり、郷土の作家の絵や壺を飾っている)
- 手に取って見ることでできる書籍が多い。手作り感の展示はホットな気持ちになる等

今回都内の文学館を巡って、課題もありませんが旭川文学資料館も全然見劣りしていないと思えました。

## 企画展 「小学校の校歌展 I」

### 好評開催中



今年一月十七日から開催中の企画展「小学校の校歌展 I」では、小学校の校歌の作詞者に焦点をあてています。

旭川市内は勿論のこと、近隣市町村や北海道内には、旭川ゆかりの詩人や歌人が作詞した校歌がたくさんあります。詩や短歌に興味がない方でも、小学校の校歌なら覚えている方も多いと思います。歴史のある学校だと親子三代にわたり歌い継がれている校歌もあるでしょう。

また、全国でも著名な作詞家が作詞した校歌もあります。

今回は、十八名の作詞家と、市内五十四校ある小学校のうち、十八校の校歌を展示紹介しています。

当企画展については、すでに市内発行のタウン誌、月刊誌、市の広報誌、道内新聞、全国紙などに取り上げられ、地元ケーブルテレビでも放映されました。

来館された方のなかには、校歌を口ずさん

でいく方も何人かおられました。

閉校になった小学校の校歌展も予定していますので、記念詩等の資料をお持ちの方は、事務局(〇一六六一二二一三三四)までご連絡いただければ幸いです。

六月十日まで開催中です。是非ご観覧ください。

また、四月十五日(土)午後一時半から、旭川市常磐館二階講堂にて記念講演会を実施いたします。

講師は著書『校歌の誕生』の著者である須田珠生氏です。参加料無料。定員五十名。予約制(三月二十二日から予約開始、事務局にて電話で受け付けます。日曜日、月曜日、祝日は休館日のため受付しておりません。ご了承ください)。

#### 〔展示紹介中の作詞家と作詞小学校〕

- ・石山 宗晏(歌人) 末広北小
  - ・齋藤 潤(歌人) 北鎮小(戦前)
  - ・小林 孝虎(歌人) 愛宕・台場・陵雲小
  - ・小野寺与吉(詩人) 愛宕東・共栄・東栄・東光・永山南小
  - ・更科 源蔵(詩人・郷土史家) 永山東小
  - ・大町 桂月(詩人・歌人・随筆家)
  - ・時雨 音羽(詩人・作詞家) 附属旭川小
  - ・勝 承夫(詩人・作詞家)
  - ・正和・青雲・新富・大有・東五条小
- 朝日小(校訂)

## エッセイ

須田 珠生

日本人や日本の学校に就学した人々にとって、「校歌」というのは、非常に馴染みの深い歌であるように思う。卒業後、母校の「校歌」をふと耳にしたとき、おそらく多くの人が学校の教室の様子や担任の教師、在学中の悲喜交々の思い出、校歌の歌詞にうたわれた所在地の山や川の情景を想起するのではないだろうか。

わたしが「校歌」に関心を持ちはじめたのは、大学の学部生の頃である。最初のきっかけは、大学のある東京から旭川の実家に帰省した折、旭川市中央図書館を訪れた時だった。二階にある資料室で、市内の学校の学校記念誌をパラパラとめくっていたところ、かつて旭川市内にあった北海道庁立旭川高等学校（現北海道旭川西高校）の学校記念誌のなかに、「校歌」が制定され、その「校歌」を皆でうたえて嬉しかったという記述を見つけた。当時のわたしにとって「校歌」という歌は、どこか教訓めいた歌であり、何となく学校が掲げる理想の児童像・生徒像を押しつけられているような気がしていた。好きかどうかと問われれば、それほど好きではない、と

答える歌であった。であるから、当時のわたしには、「校歌」をうたうことに「嬉しい」という感情を抱く人がいることが大きな衝撃であり、またいささか妙な気分がした。ただその一方で、当時の女学生らをこんなにも魅了した「校歌」という歌について、もう少し詳しく知りたいという関心も静かに湧いていた。

旭川市中央図書館で学校記念誌をめくった日から今日まで、かれこれ十年あまり、なぜ日本の学校は「校歌」を制定するようになったのか、ということの研究のテーマに据えながら過ごしている。全国津々浦々の学校や図書館、博物館、資料館などに伺っては、明治期や大正期、昭和戦前期に「校歌」を制定した学校の史料をみせていただき、当時を生きた人々の「校歌」に対する思いを感じたり、その時代の学校の空気感に触れたりすることを楽しみとしている。「校歌」は歌であるから、制定するにあたっては当然、作詞と作曲の両方の作業が必要になる。だが、戦前の学校にとっては、「校歌」の作詞はともかく、作曲をするのは大変な作業であった。当時の史料からは、知り合いの伝手を頼って作曲家に作曲を依頼したり、少しでも自校の「校歌」の威信と権威を高めようと有名作曲家を探したり、あるいは「私の薄給のなかから作曲料を工面するので少しだけ金額を負けてもらえないか」と作曲家に宛てた手紙のなかで校長が丁寧にお願いしたり：学校ごとのさまざま

な歴史的現実が浮かびあがってくる。

新型コロナウイルスの影響により、入学式や卒業式で「校歌」をうたったり、聞いたりする機会がなくなって久しい。かつての教師らが、どうにかして制定しようと奔走し、皆で喜んでうたっていた「校歌」が、心置きなく学校で斉唱されるようになるのは、いつ頃だろうか。



須田 珠生（すだ たまみ）

一九九〇年広島県広島市生まれ。五歳より北海道旭川市で過ごす。二〇〇九年北海道旭川東高等学校卒業。二〇一九年京都大学大学院人間・環境学研究所博士後期課程修了、京都大学博士（人間・環境学）。現在、日本学術振興会特別研究員（PD）。主な著書に『校歌の誕生』（二〇二〇年、人文書院）がある。



# 会員さんのページ

## 井上靖記念館開館三十年

### 記念講演会に参加して

宮川 佳子

井上靖記念館開館三十年記念で小菅正夫氏の講演会開催のチラシを見かけた。氏はNHKラジオ第一の子ども科学電話相談の回答者として、子どもたちの動物に関するあらゆる質問に分かりやすいだけでなくユーモアたっぷりのお答えをなさっていてすばらしい方とずっと思っていた。

旭山動物園の園長を長くなさっていたことは存じていたが、生でご本人の講演を伺う機会はなかった。これはチャンスと申し込んだ。ただ講演の題目が柔道中心のようだったので少しガツカリだったが、どんなことを伺えるか楽しみだった。柔道全般に無知で、氏が北大柔道部出身なことも、井上靖が旧制四高で柔道に熱中したことも知らなかった。七帝柔道では十五人団体戦の勝ち抜きで、引き分けもとても大事であることを初めて聞いた。

『練習量がすべてを決定する』これは当り前のことだろうし、その通りだと思う。

『負けない柔道が大切だ』引き分けにもつていくのも重要で勝つことだけではないのだと思つた。一対一の格闘技では勝ちがすべてと思つていた。

旭山動物園が閉館目前だった時に園長になられた氏は並々ならないご苦労があつたことだろう。それから十年で、行動展示・混合展示など他の動物園ではやっていなかった新しい動物の命の伝え方の展示を始められて、今なお進化し続けている。きつとその基本にあるものは、北大柔道部のころ身を持つて学び実際に行動してつかんだものなのだろうと強く思つた。

講演を伺い、柔道について少しは理解が深まり、負けないこと・引き分けの大切さについていくらかは学ぶことができたように思う。



## 次年度事業計画・企画展案

### ◆第二十六回旭川文学資料展

「旭川と山岳文学―相川正義所蔵資料を中心として」

会期 二〇二三年七月十一日〜十一月四日  
 ・大町桂月、小泉秀雄、清水敏一、大島亮吉、伊藤秀五郎、相川正義など登山家、山岳史家とその文章等を紹介。

### ・記念講演会を予定

日時 七月二十九日(土) 十三時半〜

場所 旭川市常磐館二階講堂

講師 久末眞紀子氏

札幌在住の登山家。二〇〇五年、日本女性として、田部井淳子、難波康子に続く三人目のセブンリミッター(七大陸最高峰登頂者)となる。

※定員五十名、予約制。参加料無料

### ◆三二展示「安部公房と旭川」

没後三〇年〜生誕一〇〇年  
 会期 二〇二三年十一月十四日

〜二〇二四年二月二十九日

・安部公房(一九二四・三・七〜一九九三・一・二二)と旭川の関係、東鷹栖安部公房の会の活動などを紹介

### ◆企画展「小学校の校歌展 II」

会期 二〇二四年二月一日〜六月二十九日  
 ・旭川の小学校の校歌と作詞者を紹介する第二弾

### ◆三二展示室にて

・他の文化団体の展示や、ダイジェスト版出張展示も予定しています。

# 資料館だより

## 受贈資料(敬称略)

(二〇二二・九〜二〇二三・三)

- ・黒田 忠 宮本美智子著書・訳本、鳥見真生訳『ミラードリームス』、村田悠水色紙他
- ・東 延江 上田満男『わたしの北海道』、アイヌ・開拓史、山内栄治『雨花台の石』他多数
- ・佐藤水人里 佐藤水人里歌文集『凍てつく銀河』
- ・鈴木 紘一 モノクロ写真(昭和十年代、旭川赤十字病院)
- ・柴田 望 柴田望詩集『4分33秒』
- ・福田 和民 蠣崎波響関係本(画集、論集)
- ・那須 敦志 那須敦志『小説 旭川青春グラフィティ・ザ・ゴールデンエイジ』他
- ・石川 郁夫 石川郁夫『司野道輔―戦時後期派作家第1号』
- ・西勝みどり 西勝洋一歌集『晚秋賦』、西勝洋一氏旧蔵短歌関係本、雑誌等多数
- ・志賀日出子 志賀日出子歌集『白い消しゴム』
- ・朔太郎大全実行委員会 『萩原朔太郎大全』
- ・梯 久美子 梯久美子『この父ありて 娘たちの歳月』

## 北海道立文学館

- ・加本 絹子 図録「細谷源二と齋藤玄」加本絹子詩集『ふるさととは母の胸』
- ・三浦綾子記念文学館 『三浦綾子生誕一〇〇年記念文学アルバム』

- ・森 敏雄 森敏雄編『三浦綾子「旭川市民文芸」寄稿作品集
- ・日野あかね 日野あかね漫画作品『ナースひよこ組』『大往生』『令和五年新説 小熊秀雄物語』
- ・山本 浩貴 橘上・松村翔子・山田亮太『TEXT BY NO』

- ・須田 珠生 須田珠生『校歌の誕生』、須田珠生研究論文「新制高等学校の校歌再制定にみるジェンダー意識の表出」他
- ・津川エリコ 小熊秀雄賞正賞 詩人の椅子



詩人の椅子  
旭川文学資料館展示室  
ご自由にお座りください

その他、各地文学館、記念館館報、各地市民文芸誌、文芸同人誌、歌誌、俳誌、詩誌等たくさんのお御寄贈を賜りました。心よりお礼申し上げます。

## 友の会人事動向(敬称略)

### 【新入会員】

- 鈴木 律子、富岡 悦子、並河 典子、難波 真実、竹内 和子、齋藤 宣彦、志賀日出子、大塚悠美乃

### 【現在会員数】(三月末現在)

一七九名(うち法人八件)

## 編集後記

只今当館企画展示室では「小学校の校歌展 I」を実施しています。旭川ゆかりの詩人、歌人等が作詞した旭川及び近郊の小学校の校歌が展示されています。ある来館者が「不思議と今でも歌えますね」と、感想ノートに記されていたのを見て、それまで校歌のことを思い出すことはなかったのですが、「ぎーんだえんえーん天塩川」歌えました！ 転校して三年間しか在籍しなかった小学校の校歌でしたが、歌とともに古いあれこれを懐かしく思い出しました。

小学校の校歌展は六月十日まで、また四月には校歌にちなんだ講演会も予定されています。

コロナによる規制が緩やかになりそうなので、是非ご来館いただき懐かしい小学校の校歌を思い出して歌っていただけたらと思います。

(ま)